旅の繪本

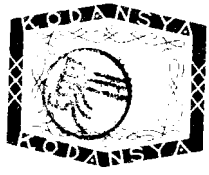
三島由紀夫

旅の繪本

三島由紀夫

講談社

旅の繪本



Ⓚ

昭和33年5月1日　第1刷發行 ©　¥ 280

著者　三島由紀夫

東京都文京區音羽町3—19
發行者　野間省一

東京都新宿區市谷加賀町1ノ12
印刷所　大日本印刷株式會社

發行所　東京都文京區音羽町3—19　株式會社　大日本雄辯會講談社

落丁本・亂丁本はお取りかへいたします。　(大進堂製本)

PRINTED IN JAPAN

目次

旅の繪本　7
ニューヨークの奇男奇女　54
ニューヨークの金持　76
ニューヨーク貧乏　82
ニューヨークで感じたこと　113
ニューヨークの炎　120
「野性的」と「衞性的」荒野　126
過去に生きる町　134

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ポートオ・プランス　136
アメリカ大學院の學生　138
ドミニカ政府のショー　140
ふしぎな首都ハバナ　142
アクターズ・ステュディオを訪ねて　144
紐育シティ・バレエ　153
アメリカのミュージカル　164
跋　211

裝釘・直木久蓉
寫眞・松崎國俊
寫眞・NHK提供

旅の繪本

旅の繪本

1　禿鷹の影

熱帶と死の情緒とは、私のいつに渝らぬ主題であるけれど、どうしてこの二つが緊密に私の中で結びついてしまつたのかわからない。ハイチで病んでゐたときも、メキシコのユカタン半島で病んでゐたときも、私をたえずこの二つのものの結びつきが魅

してゐた。ユカタン平原の密林の只中にそびえ立つマヤ廃墟を訪れて、トルテックの「死の神殿（ツオムパントリ）」が、壓へつけるやうなすさまじい夏の日光の下に草蒸してゐるのを見たとき、私はこのやうな夏のさかりにこれを見たことに喜びを感じた。その神殿の基部は、死と病と禿鷹の浮彫にかこまれてゐた。手にした矢も重たげに病氣にやつれ果てた戰士の浮彫。痩せおとろへて瞑目した自分の首を、片手に下げた戰士の浮彫。……これら死と病と荒廃の記念碑は、さかんな草いきれの中に白く浮んでゐた。ここには何か非常に私に親しい思想が隠れてゐると私は感じた。

熱帯における死がどんなものであるか私にはおぼろげにわかるやうな氣がする。元氣なとき、ハイチの首府ポートオ・プランスの風光は私を喜ばせてゐた。しかし一度病んで身を動かすのも物憂くなると、リヴィエラ・ホテルのあらゆるたぐひの熱帯植物が繁茂してゐる庭の眺めに嘔吐を催した。それらは巨大な、なまなましい光澤を放つた葉や花で、丁度われわれの菜園の草や野菜を擴大鏡で數十倍にして眺めたやう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

な、惡夢的な規模を以てぎつしり繁つてゐた。てりかがやく異樣な闊い葉の下を、綠いろの蜥蜴がときどき走つた。プールのほとりでは、放飼の巨大な鸚鵡が、燦爛たる翼をひろげて、醜いかすれた聲で啼き交はしてゐた。

そのとき私はこれら植物や動物の、旺んないやらしい自然の生命力に壓倒されかかつてゐる自分を感じた。もし私がそこで死ぬとしても、死ぬときも多分同じことにちがひない。それは死に押し倒されると感じることではなくて、無意味な過度のいやらしい生命力に押し倒されると感じることにちがひない。北方の崇高な瞑想的な神々とはことかはり、これら熱帶の國々を支配するいやらしい神々に。

……さうだ。マヤの死の神はたえず餓ゑてゐて、がつがつと餌を求めてゐる。ここでは人が死ぬといふことは、自然が自然に喰はれ、生命が生命に喰はれることであり、たとへ自然死であつても、それは何か蜘蛛に喰はれるのと似てゐる。かうして半ば文明生活に護られてゐながら、どこかに自分を打ち倒すいやらしい生々しい生命の

存在を豫感してゐるのは、私だけだらうか。

いや、私だけではない。コミュニストたちは革命の名の下に、砂塵をあげて攻め寄せてくるより強大な生命を描いてみせながら、思ふ存分、今なほ衰へぬかうした傳來的恐怖を利用する。メキシコの左翼畫家リヴェラが描く威嚇するやうな勞働者群は、人間的規模を越えて、熱帶のあくどい壓倒的自然に近づいてゐる。

しかし自分の内側の生を信じ、それに賭け、それと共に生き、あるひは、それから巨大な抽象的體系を抽出してそれにすがつて生きると謂つた北方の閉鎖的な生き方に比べて、いつも内在的な生を忘れるか黙殺するかしながら、外在的な生を豫感して生きるといふことは衰退だらうか。さうだとすれば、熱帶そのものが巨きな衰退なのであらうか。

さうではない。熱帶の人々の生き方には、その外在的なより強力な生の模倣がひそんでゐる。われわれは巨大なてらてらと光つた植物や、鸚鵡や豹の生命を模倣しよう

とする。それに參畫しようとする。……これが生きるといふことであり、これが不可能になつたときそれは死であり、模倣の代りに喰べられ同化されてしまふことなのである。

チチェン・イッツァのマヤランド・ロッヂ・ホテルの二階の柱廊から、私は鬱蒼と茂つた熱帶樹の葉むらのかげに、うす紫の寄生蘭が花咲いてゐるのを見た。と、突然、その蘭の花瓣をかすめて、數羽のたけだけしい羽音が起り、黑い影が目の前をかきみだして翔つた。それは禿鷹だつた。

死はこんな白晝に、こんなにも人々の食卓や寢椅子に近く、力强く羽擊いてゐた。その影は午後の酒を置いたテーブル・クロースの上をも翳らした。それは不吉な黑い姿をしてはゐるが、やはり强大な生命の一種に他ならないのだ。

他者としての生命、自我にかかはらない生命……、かういふものの考へ方は西歐人をぞつとさせる。それは容易に生命と死の同一視にみちびくからである。そしてから

いふ考へ方は、必ずどこかで太陽崇拜に結びついてゐる。

身を突き刺す劉喨たる喇叭の音のやうに、たえず鳴りひびいてゐる熱帶の日光。空氣は幾條もの龜裂を生じて澱み、椰子や火焰樹は目くるめく海の背景に象嵌されて身じろぎもしない。

ドミニカの首府シウダード・トルヒーヨの色濃い木蔭のベンチに腰を下ろして、灼けただれて枯れた葉を地へ垂らしたココ椰子の木の間木の間に、かがやくカリブ海を眺めてゐたとき、私の考へてゐたのもそのことだつた。

2　北米ミシシッピー州ナッチェス

君はアメリカの小都會の夜を知つてゐるか。私が夕食後ホテルを出て、むかうの辻にまばゆい電飾をかかげてゐる小さな映畫館へゆかうとすると、まだ八時半だといふ

のに、あかるい月光の下、町はすつかり人通りが絶えてゐた。活潑な小さなネオンがあちこちの軒先に、誰に見せるでもなく輝いて動いてゐた。靜まり返つた路傍に深閑とつづいてゐるパークされた車の列。口を半ばあけてゐる大きな銀いろの芥箱。ふと見ると、かたはらの灯を消したショウ・ウインドウの中には、夥しいナイフが刄のおもての反射を闇に浮べてゐる。そしてその暗い窓硝子に、筋むかひの藥屋のネオンが映つてゐる。家はどれも二階建で、積木の家のやうな風情をしてゐて、とある壁には、今は九月だといふのに、五月に來たサーカスの廣告が殘つてゐる。これら低い町並の彼方、古ぼけた教會の尖塔が、月ばかりで何もないひつそりかんとした夜空にそそり立つてゐる。

聽きたまへ、町いつぱいの蟲の音を。町のコンクリートの龜裂の一つ一つからしみ出るやうな蟲の音を。……町はまるで人の住んでゐない大きな蟲籠のやうだ。

もちろんまだ起きてゐる人たちはゐる。それが證據に、深い溜息のやうな音が近づ

いてきて、ペーブメントを辷る自動車の音だと知るときには、すでに室内燈を消した車は、私の前をすぎて次の町角に消えてしまふ。

おびただしい蟲のすがたが私を誘惑する。映畫を見ようか。それとも月夜のミシシッピー河を見に行かうか。

結局私は映畫にゆく。すぐむかうの空の下には、靜かな叢林を侍らせて、月にてりかがやいたミシシッピー河が流れてゐるのは、見ないでもわかつてゐるのだから。

……結局、映畫からかへつて寢る前に、イオラ・ホテルの七階の廊下の、非常階段の影が月をさへぎつてゐる窓ごしに、私はなほ月にかがやいてゐるミシシッピーを見たのである。

3　オルテガの店の前にて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c